

中国のほんの話(89)

## 书呆子(本の虫)の陋習

蔭山達弥

昨今の自粛による在宅時間が大幅に長くなったせい、店舗に直接出向き、商品を実際に手にとって購入するのではなく、ネット通販で商品を購入する割合が、国内外を問わず、これまで以上に増えている。古書業界もその恩恵を受けて、意外にも売り上げを伸ばしているようだ。実際、店舗を持たず、在庫は倉庫に保管して、ネット通販に特化している店は多い。実は私もその売り上げに貢献している一人で、関心のある書き手(特に作家)のことをもっと知りたくなると、著書を調べ、何冊も購入してしまう。拙宅には読むつもりで買った本が、山のようにあるというのに。家人は呆れ顔だ。

文芸批評家の故篠田一士は、私のような本好きの泣きどころについて、こう書いている。「だが、よくよく考えれば、本当にじっくり、第一ページから最後のページまで読む本など、そんなにたくさんあるものではない。その程度の本代ならば、だれでもなんとかなるはずである。読みもしない本、あるいは、図書館あたりから借りだせば済むような本を、手元に置こうとするから、本代もかさみ、家中本だらけになって、家人の鬱鬱を買うことになる。まあ、こんなことは、多少とも本で苦労した人間ならば、みな承知している事柄だが、さて、それならば、本当にこれだけはという本は残して、あとのものをすっかり処分できるかということ、そうした決断を実行に移すのはなかなかとむずかしい。」(「手にした本を読み耽る」、篠田一士『読書三昧』晶文社1983)

家人はこんな私のことを‘书呆子’(本の虫)と呼んでからかう。手元にある中国語辞典を見ると、‘呆子’とは、「間抜け、あほう」の意味。北京大学の陳平原教授も、自身が編集したアンソロジー『读书读书』(人民文学出版社1992)の序文の中で「読書はひとつの楽しみである。その楽しみは尽きることがないので、代々の読書人は読書に夢中になり耽溺した。このような読書人をむかしは‘書痴’と言った。あだ名である。今では‘书呆子’に改まったが、ばかにしている意味がないわけではない。」と述べている。



この『读书读书』に収録された一篇に、著名な言語学者、王力の『书呆子』(1942)がある。王力は‘书呆子’について、このように定義している。「これまで‘书呆子’を定義づけた者はいなかった。普通は本好きが高じて、処世の道が分からない人間を‘书呆子’と呼ぶ。私たちが見るに、‘呆’(鈍い、愚鈍である)の意味の範囲をできるだけ拡大化して、およそ本を読み文章を書くことが好きで、自分の興味を犠牲にすることに承知せず、自ら文筆は意義のあることだと思ひ、生活が裕福で地位も名誉も得ようとする者は、みな‘书呆子’としてよい。」

陳平原教授は、かつて魯迅のことを‘书呆子’と呼んだことがあった。当時、教授は誤解を恐れて、「魯迅は読書と同時に、一貫して社会における実践を重要視した。これはまさに魯迅の戦士と学者が一つになった本来の姿を示している。」と、付け加えることも忘れなかった。(陳平原『“愛書成癖”乃书生本色』、『花开叶落中文系』三联书店2013)

陳教授は2012年6月26日、中央民族大学外語学院の卒業式の席上で、「読書人はこれまで“知书达理”(知識を持っている上に礼儀正しい)ことにこだわってきた。科学技術の発展に伴い、書籍の形態も変化し、必ずしも“手不释卷”(手から書物を放さない)ではなくなった。しかし“知书”(読書による教養)があつてこそ、“达理”(礼儀をわきまえる)、それは未来永劫である。」(陳平原『知书、知耻与知足』、『同上』)と述べている。

‘书呆子’(本の虫)は、決して‘呆子’(間抜け、あほう)ではない。

かげやま たつや(非常勤講師・中国文学)